



杏林大学 社会科学部 菅原研究室

2001 菅原ゼミ 沖縄合宿

異質なもののとの出会いが、創造へとつながる



2001年11月2日 沖縄万国津梁館前にて

杏林大学 社会科学部 菅原研究室
www.SugawaraHideyuki.com

参加者

4 年	3 年	2 年
井上 拓也 金村 奈美 酒井 希世子 佐藤 さやか 太 恭子 松浦 由紀 宮崎 智行	浅見 真也 北畠 明子 下地 綾乃 白井 拓 田邊 学 永田 幸子 福間 海 弓取 祐平 勾 暁光	今村 忠裕 川田 哲也 栗城 宏行 小岩 伸一 小澤 久美子 坂本 佑美 立川 孝司 田中 雅之 戸井 俊夫

スケジュール

1 日目	
6:00	羽田空港集合
6:45	羽田空港発 JAL931 便にて出発
9:30	那覇空港着
	レンタカーに分乗して移動
13:30	琉球大学にて 比嘉ゼミの皆さんとディスカッション
夜	比嘉ゼミの皆さんと交流会
2 日目	
午前中	各自で自由研修
15:00	ワールド学生会議イン沖縄 参加
夜	名桜大学 白井ゼミの皆さんと交流会
3 日目	
10:00	カタリベによる説明を聞きながらアプチラガマ見学
午後	各自で自由研修
19:00	空港集合
20:15	空港発 ANA992 便にて出発
22:25	羽田空港着 解散

琉球王国と中国の歴史

勾 暁光 (3 年生)

1368 年、中国に明 (みん) 朝が成立します。明は、中国を中心とした国際秩序の構築を目指し、近隣諸国に入貢をよびかけるとともに、海禁政策をとって自由貿易を禁止しました。つまり、盟主としての中国と臣下としての周辺諸国の位置づけを明確にし、明の皇帝に忠誠を誓う国に対してのみ、交易を許したのです。このような、中国を中心とした東アジアの国際秩序が「冊封体制 (さくほうたいせい)」とよばれるものです。

14 世紀には、現在の中国が東アジアの中心的役割をになう新秩序が形成され、日本をふくむ周辺諸国と交易をおこなうようになりました。沖縄近海をふくむ東シナ海は、多くの船が出入りする交易の場となり、琉球列島は商人たちが行き交う中継地点としてにぎわいました。

15 世紀巴志王は統一琉球、中国明朝王が尚の名字を賜ります。これが尚王家を頂点とする琉球王国のはじまりでした。それ以降 450 年間、王国は存続しましたが、明治維新により成立した日本政府が軍隊を派遣、首里城から国王尚泰 (しょうたい) を追放しました。そして、沖縄県を設置が宣言され、琉球王国は滅亡したのです。

首里城は琉球王時代建築されました建物です。首里城は中国の宮殿様式代表の紫禁城に似ています。首里城は東西約 400m、南北約 200m で、城壁の石垣は厚さが約 4m、高さが 6~11m に積み上げられ、場内には、歓会門、瑞泉門などの大小 12 の門、さらに城外には二つの坊門がありました。歓会門・瑞泉門などの門をくぐって中心部の広場 (御庭 : うなー) に入ると、広場を取り囲むように正殿・北殿・南殿などの建物が建っています。首里城の正殿王座の上に康熙 22 年御「中山世土」が有ります。明、清朝 500 年間琉球王国が中国的属国になり、合わせて進貢 300 回、両国交流頻繁、平和相处。それに沖縄に入ると、どこでも見られるのシサというものは、もっとも中国の玄関に置いた災難を避ける「石敢当」(Shi gang dang) という名前の石ライオンです。沖縄代表料理「豚足」の煮物も中国明、清朝時代の名物です。総べて琉球王国時代中国からきました。(図 1)

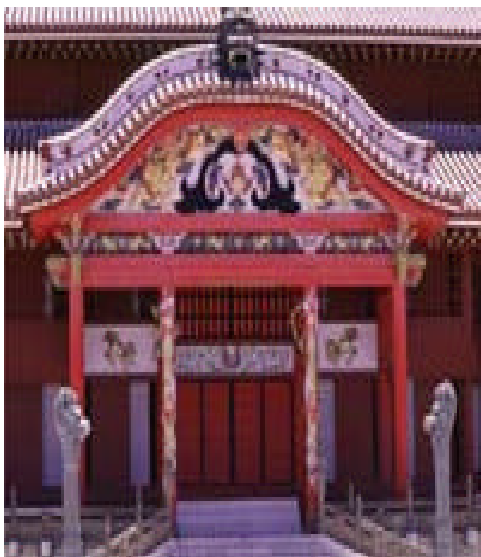
中国古代の星象学では、紫微垣 (北極星) は天の中心であり、天帝の居住するところである。天人対応の思想にとれば、人間の皇帝が居住する皇宮は天上の紫微宮に相当するところである。皇帝の皇宮を紫禁城と称する所以である。明の第三代皇帝である朱棣が帝位を奪ってから北京に遷都することを決め、紫禁城宮殿を建て始めた。明の永樂 18 年 (1420) この宮殿は完成した。1911 年の辛亥革命によって封建帝制の最後の王朝 清王朝が倒れ、1924 年に退位した溥儀が紫禁城を追われた。これまで五百年の間、24 人の皇帝がここに住み、中国全土への統治を行なった。

紫禁城は南北 961 メートル、東西 753 メートル、敷地は 72 万平方メートルの規模を誇る。高さ 10 メートルの城壁に囲まれ、その外に幅 52 メートルの濠がめぐらされている。四面に城門があり、南の午門は現在、観光の入り口であり、北の神武門は出口である。紫禁城には、南北に通る中央線に沿って宮殿建築が配置され、左右対称につくられている。赤い壁に黄釉の瓦をいただき、柱や梁の表面は文様や彫刻に埋められ、きらびやかである。数多くの宮殿や楼閣からなった建築群が壮麗で、雄偉である。朝日と夕暮れの中の紫禁城は幻想的世界のようで、いっそう美しい。

紫禁城は前朝と後寝の二つの部分に分かれる。前朝は太和殿、中和殿、保和殿を中心とし、左右に文化殿、武英殿を配してある。ここは皇帝が国家の行事を行ない、政治の活動をする場所である。後寝は乾清宮、交泰殿、坤寧宮、東西六宮、御花園を中心とし、東側に奉先殿、皇極殿、西側に養心殿、雨花閣、慈寧宮などを配してある。ここは皇帝と后妃たちが居住し、宗教活動を行ない、日常の政務を取り扱う場所である。建築面積が延べ 16 万 3 千平方メートルに達する宮殿建築群はうまく配置され、整然としている。その一つ一つの建物は封建的礼制によって建てられ、封建帝王の最高至上の権威を現わすものである。昔、民衆が紫禁城に近づくことは許さなかった。(図 2)

首里城に入る瞬間、不思議と感じました。建物の色、構築、服装をみると中国故宮に戻ってしまいました。日本の人々は首里城と中国の友好関係を大事にしているの気持ちがすぐわかっていきます。この気持ちは首里城をみにいた中国人達全部分かっています。私達は中国と日本友好長く続けるように願います。

(図 1)



(図 2) 紫禁城全景



井上 拓也（4年生）

（1）今回の合宿を通して学んだこと、有意義だったこと

沖縄は2度目の訪問となった今回の研修であるが、高校の時修学旅行で訪れた時とは、ちがう視点（東南 Asia 訪問の経験から）で沖縄を見たせいもあり、カルチャーショックを受けた。同じ日本でありながら、日本でない沖縄、そう感じられたのが今回の研修でもっとも有意義だったことである。

一つ目に例えば、琉球大学、名城大学の学生との交流会では、ウチナンチュー（沖縄人）としてのアイデンティティーをしっかりと持っており、それが彼らに大きな影響を与えていること（あまり就職のことは深く考えないなど）を非常に感じた。またワールド学生会議では、そのことを前提とした華人ネットワークならぬ、ウチナンチューネットワークの形成を考えた、海外交流の進め方など、ウチナンチューとしてのアイデンティティーが根底にはあった。果たして、私のアイデンティティーとは何か？そんなことを思わされた。

二つ目に、沖縄が日本でないと感じた事、沖縄は長い歴史の中で翻弄され日本国の沖縄としてなっているが、その歴史を知り、文化に触れすべての事（同時多発テロしかり）に国々の思惑があり、実際感じれたのが良かったのではないだろうか。

（2）反省すべき点

海パンを持っていかなかったこと着替えを持っていかなかったことか。あと4年生と
言う立場上、口だけ出してたことかな？もっと3年生を助けてあげれば良かったかな。

（3）改善点、次回へ向けての要望点

反省点とかぶるが、旅にハプニングはつきもので、その辺の事を踏まえ、経験豊富な4年生がもっと事前に予測、口出しするべきなのではないでしょうか？

（4）合宿全体を通しての感想（意見じゃなくていいよ）

香港が、沖縄になって少し、ショックだったが、実際訪れた沖縄は東南アジアだった。その点は、沖縄で良かったと思うし、現地学生との交流会も、海外と比べ、言葉が通じやすい分、かなり有意義な研修だったと思う。

金村 奈美（４年生）

（１）今回の合宿を通して学んだ事、有意義だったこと

私がこの合宿で学んだことは、平和の大切さです。マブチラガマについては、正直言って甘く見ていました。資料館みたいなのがあったり、明かりも少しはあると思っていました。しかし、実際はそうではなく、それが余計に「当時の人たちは本当に大変な時代に生きていたんだな」と実感させました。今の私達の生活からは想像できないような辛い体験を聞いているうちに、自分がどれだけ平和で恵まれているのか再確認しました。そしてなにより、辛い体験を語ってくれているのに、最後に笑顔でさとうきびの話や、ステキな車に乗って颯爽と帰られた語り部の方には、心からありがとうという気持ちを伝えたかったです。戦争で亡くなられたかたや、今もその体験を語ってくれる方々のおかげで、今の平和な生活があると思います。私も、その平和の中で生きている人間として、平和を築いてくださった方々に恥じないような生き方をしようと思いました。

（２）反省すべき点

反省すべき点は、私がこの合宿について受身の姿勢で臨んでしまった事です。体調を崩していた事もあって、ぎりぎりまで参加できるかどうか分からなかった状態だったので、準備もおろそかでした。そのために、うちなんちゅ大会が一体どういう意味のために開かれているのかさえ分からず、沖縄に行ってしまいました。マブチラガマももっと下調べしていれば、感じることもっと多かったかも知れませんが、それに何より、３年生に任せっぱなしで、合宿の中心となって動いていた３年生はとても大変な合宿になったと思います。協力しあって、みんな楽しみながら研修できる事が出来なかった事を反省しなければいけないところだと思いました。

（３）改善点、次回へ向けての要望

改善点は、私達の交流についてです。今回の合宿は、新しく入った２年生との交流も目的のうちに入っていました。しかし実際は、他大学との交流会ばかりで、夜の食事を私達だけでとることはありませんでした。他の人たちと交流する事も大切ですが、その前にもっとゼミ内同士でも、交流を深めたかったです。

あと、個人的な意見ですが、毎年ゼミ合宿は杏園祭の期間中やその直後に行われます。それは実行委員の私にとっては無理が多くて、参加できなかったり万全の体調で望む事が出来ないのので今後は配慮が欲しいです。ゼミ中に先生が、優先順位をゼミではなく、他のクラブ活動に置くのであればゼミをやめればいい、と

いう発言をしました。しかし、私はそれには反対です。私やクラブ活動で杏園祭実に参加した人を否定されているように感じました。クラブ活動も立派な学校行事の一環なのだからそれを否定されると、学生の選択肢を狭めているようにしか感じられません。ゼミの重要性も勿論分かりますが、学生が行う他の活動を認めなくとも、否定するのはいけないことだと思います。

(4) 合宿全体を通しての感想

今回のゼミは、一人一人の貴重な体験になったのは勿論、菅原ゼミにとっても一つのターニングポイントになったのではないかと思います。菅原ゼミは、いまいち団結力に欠けていて、協力体制が確立していませんでした。合宿はその問題点がはっきり露呈して、各自がその問題について目を背けられない状況になりました。そのために、ゼミの体制を含めた話し合いが合宿後に開かれたのだと思います。この合宿がいききっかけになったので、今後の菅原ゼミは協力の出来るよいゼミになると期待しています。

酒井 希世子 (4年生)

合宿を通じて学んだこと、有意義だったこと

今回の合宿で有意義だった点は、「沖縄」を深く知ることができたことと、ゼミの縦と横の交流を深めることができたことである。菅原ゼミの合宿に参加するのは今回で4度目だが、毎回現地の人々と交流することができる点が何よりも楽しみであった。今回も期待通り現地の学生と交流を深め、同じ年代であるからこそ色々な違いにも気付き、また共感することもできた。琉球大学と名桜大学2つの大学を訪れ、実際に学食で昼食をとったり、教室で交流会を行ったりと、普通の旅行ではできない、菅原ゼミだからこそできる体験をすることができた。特に琉球大学の比嘉ゼミとのディスカッションは非常に新鮮で有意義だった。このディスカッションで度々沖縄の米軍基地の話が取り上げられ、私は琉球大の学生と話していく中で、米軍基地のあり方というものを改めて考えさせられた。私の住んでいる神奈川県にも、杏林大の近くにも米軍基地があるのに、私は正直なところあまり身近に感じていなかった。また、身近に感じていなかったため、簡単に基地を廃止すればいいと考えていた。しかし、沖縄の島の大部分を占める基地を実際に自分の目で見て、学生の話聞いて、基地は沖縄の経済と深く結びついており、そう簡単には廃止できない難しさを知った。同時に、沖縄の人々の中には廃止に異議を唱える人もいるということも知った。私単純に、基地の人間は外へ自由に出入りできるのに、外部の人間が基地に出入りできないのはおかしいと感じた。この矛盾は誰もが感じていると思う。今後は基地との共存

を目指して、情報の交換や国際交流を沖縄県とアメリカとの間で行っていきべきだと思う。

2, 3) 反省点と改善点と要望

今回の合宿で反省すべき点は2つある。1つは合宿の段取りが遅かったことである。特に現地の大学との交流会の準備があただしかった。今回は日本国内であったから良かったものの、海外研修の場合ならば実現不可能だったかもしれない。やはり合宿の準備は最低でも2,3ヶ月前から始めて、旅行係を中心に話し合いを行っていかなければならない。

2つめは団体行動が時に乱れてしまったことである。今回は2泊3日という短い日程の中、朝の集合時間が早かったり、2日連続で飲み会があったりとかなりハードスケジュールだった。私個人としては、個人で来ている旅行ではなく大人数で来ている合宿であるから、ある程度のモラルは守るべきだと思う。また個人一人一人で行中の健康管理はすべきだと思うので、次回からは改善してほしい。

また要望としては、現地の学生との交流会(飲み会)はスケジュールに合わせて組んでほしい。今回の場合は急だったということで2日とも交流会だったが、本来なら1日が飲み会でもう1日はゼミ内の親睦会や反省会の時間にあてるのがベストだったのではないかと。せっかく泊り込みで来ているのだから、普段はゆっくりとできない話し合いなどをすべきだと思う。そしてもうひとつ、合宿では全員名刺を持ってほしい。今回は一部の人だけが持っていたが、今後は2年生にも作り方を教えて、ぜひ交流会の時などに活用するべきだと思う。

4) 感想

今回の合宿は、4年の私にとって最後になるかもしれない合宿だったので、行く前から楽しみだった。今2泊3日を無事に終えて、期待通りのいい合宿になったと改めて思う。2年生は入って間もなく、私自身は前期のゼミにほとんど参加しなかったため、ゼミのみんなとあまり話す機会がなかった。しかし、今回の合宿で2,3年生と交流を深められたので、非常に良かった。また、4年生とは思い出話に花を咲かせながら、色々な話ができて楽しかった。みんなのいつものゼミでは見られない一面を見ることができ、これこそが合宿の醍醐味だなと思った。

反省点はいくつかあるが、それがあるからこそ次の合宿がより有意義なものになると思うので、2,3年生にはがんばってもらいたいと思う。私自身の感想としては、琉球ガラスも作り、ブルーシールアイスも食べ、思い出に残る合宿だった。

佐藤 さやか（４年生）

私は、今回の合宿において１日１日、全く違ったことを学び、また、考えさせられる事があったので、このレポートを１日ごとに項目（１）（２）（３）で書き、そして、最後に（４）をまとめて書こうと思います。

１日目

（１）今回の合宿を通して学んだ事、有意義だった事。

１日目、私にとっては初めての琉球大学、大学内に信号機があり道路と駐車場が沢山あって、校舎が１つ１つ遠い。通学している人は大変だなと感じました。

そして、比嘉ゼミとの交流会。私は大きな教室で先生の授業を聞くものと思っていたので、生徒の少なさと教室の小ささに戸惑いを感じました。しかし、実際は生徒に対し授業で習っていることや、沖縄の問題について聞くことが出来、大人数で学ぶ授業形式より、より細かな内容が聞けたのではないかと思います。私達に付いて教えてくれた方は、とっても沖縄について勉強していて、歴史（年代も）を全て把握していました。戦争時代の事、外国人に襲われた女の子の事件の事などがきっかけで、現代の沖縄では問題として取り上げられている事を知りました。

米軍基地によって、沖縄の住民が迷惑をしている（治安が悪くなる）点もあり、しかし、逆に米軍基地があるからこそ、その周りの住民の商売は成り立っていたり、土地を貸している人は生活が出来ている。と言う現状もあり、米軍基地に対して賛成か反対かと言うと答えづらい点が多いと知りました。しかし、比嘉ゼミの方々は大半人が反対派だそうです。それは、授業において学んだからであり、他の事を学んでいる学生や沖縄の若い人々は米軍基地について深く考えている人は少ないとも言っていました。この現状に対してもこれからの沖縄はどうなっていくのかと言う不安があるようです。

また、現在テロ事件が起こっている事もありそれについて質問をしたところ、観光客が来なくなってしまって、収益が少なくなり就職率や失業率も減ってきたと言っていました。しかし、私自身は沖縄に観光客が来る事によって、星砂のある海が無くなったとか（人工的な海が増えた）町を汚されるとか、様々な害を与えているものだと思っていました。しかし、実際は観光客によって、ほぼ沖縄は成り立っているため、害を与える事もあるが、観光客が来ないと困ると言う現状に驚きました。また、マスコミが騒ぎすぎで、観光客が減ってきているのだから、マスコミはやりすぎだとも言っていました。

これは、私自身もそう思いました。実際行ってみると、全く危険な雰囲気は無いしどこが危険なのだろうかと思いました。琉球大学では知らなかった沖縄の現状を知る事ができてとても勉強になりました。

夜の交流会では、皆さんとても親しみやすく楽しかったです。

しかし、お酒の飲めない私としてはよく飲むなと言うのが本音でした。琉球大の方々は車

で来ているにもかかわらず、お酒を飲み、警察が出まわる時間(11次頃)には解散するそうです。東京人の私達は飲酒運転を気にし、地元民は気にしないんだなと思いました。

(2) 反省すべき点

琉球大学での御昼の交流会において、事前に沖縄について勉強もしていなく琉球大学についても調べていなかったのが、反省しました。結果的には話が途切れずに楽しく出来たのでよかったのですが、もし、もっと調べておけば、現地でしか聞けないお話を聞けたのではないかと思います。昼、夜の交流会のどちらにおいても、琉球大学の人達を動かしてしまったと感じました。沖縄の人々のやり方が分からなかったと言うのもあるのですが、私達から突然交流会を申し込んだのに、机の設定や、飲み会の段取り、オーダーの時や飲み物がきた時などほぼ、琉球大の方々にやってもらって申し訳無く感じました。

(3) 改善点、次回に向けての要望

もし、今度どこかの大学の方々と交流会が出来るとしたら、次回はその学校の事、学んでいることの内容、地域についてなど、下調べを十分にしておきたいと思います。そして、突然の申し込みではなく目的をはっきりさせた上で、ゆとりのあるの交流会をひらきたいとおもいました。1日目は呑んで寝ている人や、一人なってしまっている人がいて、ちゃんと交流できたのかなと心配になった点もあったので、次回はもっと積極的に動いて欲しいと思いました。

2日目、(1) 今回の合宿を通じて学んだこと、有意義だった事

ワールド学生会議と白井ゼミとの懇親会。ワールド学生会議では、初め何をして良いのが全く分かりませんでした。歩き回ってお話を聞きに行ってもいいと言うことを知り、聞きに行った所、何について話しているのかが何となく分かりました。テーマにそって討論をしていると分かったのですが、なぜそのテーマになったのを聞いたら関係者の方々も分かっていなかったのが驚きました。しかも、討論している方々が選ばれた人と聞いていたのに、討論している人本人に聞いたら頼まれてやっていると言う返事がきたので、よけいに驚きました。

白井ゼミとの懇親会は、先生がとても優しくそうでもっとお話をしてみたかったです。生徒の方々も、皆さん協力的で打ち解けやすく暖かい雰囲気がありました。テロの話になった時、ホテルでアルバイトをしている人は観光客が来ないため、皆くびになったと言っていました。テロやマスコミの影響が身近に影響している事を実感しました。大会について話を聞いたら、詳しい内容を教えてくれたのですが、テーマについてはやはり分かっていない様でした。ここでも、やはり沖縄の方はよく飲むなと思いました。

(2) 反省すべき点

反省点、ここでもやはり、全てを沖縄の方々に任せてしまったなと言うのが気になりました。それと、1番気になったのが、全体的に見て皆疲れていたせいかもしれませんが、あまり話そうとしている人が少ない気がしました。タバコを吸いたいからなのかもしれませんが

が、外にずっといる人や、携帯で話している人、ゼミ生だけで話している人などが私は目に付きました。白井ゼミの方々も固まってしまうと言うのもあるのかもしれませんが、やはり、こちらから交流会を開きたいと言ったからには、もっと積極的に話して欲しかったです。大会の時でも、ずっと座ったままの人、寝てしまっている人が目に付きました。私も眠かったし初めは全く分かりませんでした。つまらないなとか何をしたら良いのかとも思っていました。しかし、自分から動いて分かってほしい限り、何も始まらないと思って動いてみたら何となく分かったので、皆も少し積極的になって欲しかったです。

(3) 改善点、今後に向けての要望点

今後、何にしてももっと積極的に動くと言う気持ちと、こちらから申し込んでいると言う気持ちを強くもっていきべきだと思います。

3日目、(1) 今回の合宿で学んだこと、有意義だった事

マブチガラマでは、あのようなくらい所でどの様にして生活していたのか、どこにどうやって大勢の人が収容できたのかがとても不思議に思いました。しかも、私より年下のこが暮らしていたと思うと、自分はなんてわがままで、裕福に暮らしているのかと思いました。黙祷をした時、今までにない暗闇と沈黙がとても怖く感じました。ここに一人にされたら精神的におかしくなりそうな気がしました。貴重なお話を聞けて、また体験も出来て本当に良い経験になりました。その後の自由行動も、戦争の名残を受けて祈念公園へ行き、ひめゆりを見て戦争の怖さを知りました。しかし、思ったことは、初めにひめゆりや祈念公園に行ってからマブチガラマに行けば、もっと感情移入できたのではないかと思いました。そして、グラス造りに行って初めての体験で本当に楽しかったです。段取り良く、スムーズに全てがうまくいって、4年生のチームワークの良さを感じました。

(2) 反省すべき点

マブチガラマで皆の集まりが悪かった事、懐中電灯、軍手を持ってこなかった人が多かった事が1番気になりました。自由行動では反省点は特にありません。

(3) 改善点、次回へ向けての要望点

やはり、こちらから頼んでやってもらっていると言う意識と時間厳守と言う意識を十分に持つ事が大事だと思います。

(4) 合宿全体を通しての感想

今回の合宿で4年生の団結力が強まった事(特に女子)や、3年生がゼミに対して考えている事、2年生一人一人の個性が良く分かり、ゼミ内を知る上でもためになりました。また、沖縄の人が本土を出てもまた戻って来るほど沖縄を愛している事。風土や分化の違い等も分かり勉強になる点が沢山ありました。旅行係の人(出発前はどうかととても心配になりましたが)とっても頑張ってくれたので、頼もしさを感じました。今回、合宿中に向こうの生徒の方から「何で沖縄にしたんですか?」と聞かれ

とって戸惑いました。自分で決めておきながら、目的よりも先に、安くてすぐ行ける、香港が高かったから、下地さんがいるから等その他違った理由で決めてしまった事に反省しました。なので、今度からは目的があってその場所に行きたいという方向で進めていって欲しいと思います。

そして、今回合宿を通して感じた事、他の4年生も言っていた事ですが、時間を守れず送れて来るという場面が多かったにもかかわらず、ちゃんと謝っている人がいなかったきがします。先生の「ほうれんそう」と礼儀と感謝の心の重要性を改めて実感しました。

太 恭子(4年生)

今回の合宿は過去最高の内容盛りだくさんの合宿だったと思う。時間的には余裕がなかったが、その分得たものも多かった。

1日目の琉球大学でのディスカッションは沖縄の学生の生の声が聞こえる有意義なものだった。ここでわたしは主に 基地問題 マスコミ 気候・慣習 について議論した。基地問題・・・今回知ったことで最も印象に残ったのは沖縄県民の過半数が基地に賛成しているという事実。(小学生の時に社会科で教わった知識がとても役立ったので、人生無駄はないと思った。) 本土で報道されている現実と現地情報は違うらしい。

マスコミ・・・沖縄には新聞が地元紙 2 紙しかなくあまりリベラルな感じはしなかった。内容も両紙とも基地反対論中心で、中立の立場はとらないらしい。新聞の 1 面にお葬式情報を載せるというのは知ってて、なぜなんだろうと思っていたが、地元新聞のみしか存在しないのが原因だと知って驚いた。

気候・慣習・・・台風になれた土地なので、上陸しても平気。またよく水不足になることを知った。下地も言っていたが、地元に戻るという意識が強いと感じた。そして酒好き。本土にはわからない、現地の大学生とのディスカッションは大変有意義であった。しかし反省点として、ディスカッションするということは事前にわかっていたはずなので、自分でもっと調べていけばより深いディスカッションができたのではないかと思う。沖縄に関して自分は新聞上、ニュース上の知識しかなく、自分の勉強不足を後悔した感がある。また1人の人とだけのディスカッションに終始してしまったので、もっと多くの人とディスカッションできたほうが良かった。

2日目のウチナーンチュ大会については、なんというか自意識が強いと感じた。沖縄県民としてどうしてそこまで自意識過剰なのだろうか? 同じ日本人だし、地球人ではないのか? という疑問があった。しかし翌日のマブチラガマに行き、沖縄の戦争というものをリアルに感じる事ができた。あの暗く、狭い空間に何千人が逃げ込み、生き延びようとした。死んでいく多くの人があった。自由行動の時に平和記念公園に行った。23万人の戦没

者の碑が圧巻だった。

琉球王国という歴史があり、戦争があり多くの人が亡くなった。戦争はいつも弱者が死んでいく。その歴史を考えたら、ウチナンチュとしての自意識が高いのが納得できた気がした。行く順番が違えば1つ1つもっと有意義に感じることもできたのかもしれない。今回の合宿で有意義だったことは、普段のゼミ活動だけではわからない個人の性格がよくわかったり、今菅原ゼミの問題点はどこなのか見えたことが良かった。菅原ゼミに対する自分の反省点も分かったので、今後のゼミでは反省をいかしてがんばっていこうと思った。あと個人的には団結力が高まったことが良かったと思う。今までも我々は順調に菅原ゼミ生としてまとまってきたと自負しているが、さらに友情が深まった気がする。これから卒論という孤独な闘いが本格的に始まるが、精神的にお互い励ましあってがんばっていこうと思った。

全体的に見て、どの学年のゼミ生も今後のゼミをやっていく上での問題点もわかったと思うので、あとは改善していただけないのでがんばっていきたい。

合宿全体の感想はズバリ楽しかった。色々あったようですが、わたしは面白かった。合宿は普段のゼミでは味わえない人間関係の醍醐味や成長も見られるので(ずっと一緒にいるから)合宿は今後も続けて行って欲しい。そのためには事故なく、安全に、社会人としてそれぞれが責任を持って行動して、次回に繋げていけるように・・・と老婆心ながら願っています。

松浦 由紀(4年生)

合宿を通して学んだこと

今回の沖縄合宿。その中で最も印象に残っていること、それは3日目のマブチラガマでお話を聞くことができたことである。私の生まれた秋田県でも、終戦間際に土崎港という場所に原爆が落とされたという歴史があり、毎年終戦記念日には土崎空襲で犠牲になった方への追悼式が行われている。私も、小学生のころに一度参加したことがあるが、戦争と言うものに全く実感が湧かなかったため、私にとってはひどく窮屈な時間であったことを記憶している。しかし、今回戦時中のお話を聞き、当時の人はどれだけ大変な思いをしたのかということを少しばかりではあるが知ることができたように思う。午後の自由行動では、戦死された人たちの名前が刻まれている場所へ行き、その数の多さに言葉を失った。マブチラガマでのお話の中で「戦争ではえらい人は助かって、いつも罪のない人たちばかりが犠牲になるんですよ。」とおっしゃられていた言葉が忘れられない。

反省すべき点

反省すべき点をあげると、それは圧倒的な下調べ不足である。特にそれを強く感じたのは1日目のディスカッションのときと、3日目のマブチラガマのときである。1日目のディスカッションでは、テーマが与えられてそれについて全体で話し合うものだと高をくくっていた。そのため、沖縄問題と呼ばれるものもあまり頭に入っていない状況でのディスカッションとなってしまった。幸か不幸か、アメリカ同時多発テロがあり、沖縄の米軍基地のことを何度かニュースで聞いていた為、米軍基地に関する質問はできた。しかし、他にも沖縄独特の文化や風土があるだろうに、そういったことに関してはほとんど触れることができなく、後悔の念がぬぐえない。また、3日目のマブチラガマに関しても同じことが言える。戦争を体験された方のお話は今でもとても現実味を帯びて聞こえた。このようなすばらしい機会に、「直接いろいろなことを聞きたい」と言う想いは強かったのだが、実際のところ戦争に関する知識不足で質問を投じるほど物事を理解していなかった。

事前にもっと沖縄のことを学んでいたら、もっと価値ある旅行になったと思うと、とても悔やまれる。

改善点

旅行に行く際には、最低限の下調べが大事だと言うことを痛感した。また、今後どこに行くにしても現地の学生達との交流があるのであれば、なにかテーマを設定してディスカッションを行えたら、単なるおしゃべりとは又違う価値が見出せるのではないかと思った。合宿全体を通しての感想

旅行係のがんばりで、かなり充実した良い合宿であったと思う。私個人的にも、沖縄は初めての土地と言うことで、期待も人一倍多かったが、その期待を裏切らない体験ができたと思っている。沖縄の人たちを身近に感じる事ができた今回の合宿は、私をほんの少しだけ変えてくれたような気さえする。これからはあまりあせらずゆっくり進んでいこうと思った。

宮崎 智行（4年生）

（1）今回の合宿を通して学んだこと、有意義だったこと

今回の合宿を通して有意義だったことは、琉球民族のアイデンティティーを肌で実感できたことである。

その一つとして言葉がある。琉球語は日本の各地の方言とは大きく異なり、例えば、自分のことを標準語では『私は、自分』と話すが、琉球語では『ワーナー、ワン』と話す。これはアクセントの違いや、語尾、固有名詞の違いだけではなく、沖縄でしか意味が通ら

ないということである。それと、なんとなくニュアンスが違っているような感じすらある。実際に沖縄の人同士での会話を聞いていると、まるで外国にいる錯覚を覚え、どこか通訳を欲している自分に気づかされる。

二つめとして、住んでいる土地に対する感覚の違いがある。日本は島国であるが、日常、沖縄の人達ほど本土の人達は『シマ』を意識してはいない。沖縄の人達は本土と沖縄を『ナイチとウチナン』と呼び分けていて、『ウチナン』は『ウチナー』とも言う。自分の感覚では『ウチナイ・内内』と聞こえてくる。まるで沖縄が中心にあるかのように、外に本州があるかのように、これは天気予報で見る日本地図をまるで正反対に置かれたかのような気がしてならない。

三つめとしては、沖縄には『ウチナンタイム』と呼ばれる暗黙の何かが漂っている。『ウチナンタイム』とは、時間に対する意識のズレである。沖縄の人達に、皆が皆当てはまる訳ではないが、交流を交わした学生達の背後には『ウチナンタイム』がいた。いたのである。

四つめとして、米軍基地の存在がある。八王子の近くにも、『横田基地』、『厚木基地』があるが、存在感は沖縄のその比では無い。それは規模や数の問題ではない。旅行感覚で沖縄に来た自分にとって、世界情勢を知るには、いとも簡単であった。沖縄の人達が世界最大規模の要塞と共に暮らしている間は、同時に世界と共に運命を共有しているわけである。その人達と同じ国民なのに、そこにある基地の同盟国の国民なのに、平和ボケのまま平和だと思っていた自分が恥ずかしくなった。

これら一つ一つは、琉球民族のアイデンティティーとしてしっかりと日常生活の中に存在している。普段、なァなァと日常を過ごし、自身の民族を意識もしてなかったことを気づかされた。そして、沖縄の人達のことを羨ましく思った。自信をもって故郷が沖縄だと言える、琉球民族であると言い張れることが、羨ましい。

メディアから入ってくる情報の限りでは、沖縄は日本の一部とでしかないという自身の認識が覆させられた。沖縄は沖縄県では無く、琉球国であるということ、沖縄県民は、琉球民族であるということ。そして、真の平和が訪れたときに、再び琉球国としての独立の一步が、はじまるのではないかと感じた。

(2) 反省すべき点

四年生として参加したが、ひとりよがり、ふんぞり返ってゼミ全体に参加していなかったことが反省すべき点である。もっと後輩達にいい見本となるべき行動をとるべきだった。例えば、自由時間の使い方、集合時間に合わせた行動の仕方。

合宿係としては『四年生だから』&『タイ・カンボジアで燃え尽きた』という、身勝手なひとりよがり、がなによりも先にきて、何一つできなかった。3年生を中心と考えたって、やるべきことはたくさんあるはずだと思う。例えば、仕事を手伝うのはもちろん、

わずかな気配りでもできたはず、同じ4年生の合宿係の佐藤さんに感謝します。

個人としては、交流会に見いだせる物が無かった。もっと沖縄について、事前に勉強しておくことが必要であった。国内だから気を抜きすぎていた。合宿中にも生活のリズムが必要。アブチラガマで懐中電灯・軍手の必要性を知っていたのに呼びかけることができなかった。後ろの車をおいていった…。

(3) 改善点、次回へ向けての要望点

それぞれの係りの仕事を明確にしておくべき。(いつどこで誰が何を)

前日の時点で全員が、翌日の予定をしっかりと確認する。個人の意識の問題なので、個人旅行と団体行動であることのけじめをしっかりとつける。

自由行動がある場合に、合宿係が、あるていど事前に各々の行動を把握しておく。

合宿のお金を積み立てにする。海外合宿ともなれば、最低でも十数万は、個人に必要なになってしまうのでから。例えば、3月の合宿に12万円必要となる場合。12月&1月に3万円づつ積み立てておくと、一ヶ月前の2月に収めるお金が6万円になる。

仮に車を使う場合、できるだけ少ない車数にする。団体行動をしやすい。車の状況を把握しやすい。デメリットとしては、ゼミ全体のフットワークが低下する。

(4) 合宿全体を通しての感想(意見じゃなくていいよ)

『携帯電話』これなくして今回の合宿はできなかったと思う。集合時間、人の所在・現在地の確認などなど。いかに『携帯電話』に頼っているのかが見えた。確かにあればあるで便利なモノだけど、何かが緩んでしまう。

『下地綾乃』彼女なくして今回の合宿はできなかったと思う。琉球大学・名桜大学との交流会、道案内など…。交流会では、彼女が先陣きって盛り上げて場が暖まるから、相手方との距離がぐっと縮まったのではないかと思う。

今回の合宿に限らず、菅原ゼミに入ってから学んだことで、同じ金額を使う旅行でも工夫次第で有意義なものにも、そうでないものにもなるということを改めて実感した。

合宿に行くと学校では見ることはできない、その人の本性みたいな物が見えてくる。

ウチナンチュ大会の写真が掲載されている新聞を発見したときは驚いた。はやく誰かに知らせたいとは、まさにこのことだと思った。

買ったお土産よりも、作ったコップが何よりも嬉しい。

沖縄合宿に参加してよかった。

最後の日が楽しかった。

浅見 真也 (3年生)

今回の合宿を通じて学んだこと、有意義だったこと

今回、沖縄の琉球大学の比嘉ゼミ、名桜大学の白井ゼミと交流ができた。初めて会うので初めこそ緊張したが、話していくうちに打ち解けていってまじめな話しはもちろん、夜の懇談会ではお酒のおかげかもしれないが冗談とかいうようになりとても楽しかった。ワールド学生会議には参加できなかったが・・・。

このように交流会をすることで普段自分が考えていることを聞いてもらえるし、それについて相手はどうおもっているかなどもわかったので良い体験できたとおもう。

普通の合宿ではこのような交流会は行えないが、菅原ゼミではインターネットを最大限に利用してこの交流会を持つことができたことにこのゼミには行って良かったなとおもう。

このような体験は今しかできないし、後になっても本当に良い体験ができたとおもうでしょう。

(2) 反省すべき点

まず旅行係としてですが、うまく計画がたてられなかったため(というか四年生にこの合宿の計画、手続きなどをほとんど手伝っていただいてしまったことに反省)スムーズに合宿ができなかったとおもう。

また休み期間ではないため二泊三日というかなりハードスケジュールにかなり予定をいれたので、かなりしんどかった。しょうがないかもしれないが・・・。

あとレンタカーを8台借りたことについて。やはり8台にもなるとみんながいっしょに行動できなかった。(ある程度予想できていたが...)これが合宿をスムーズにできなかった。

またここでいうのもなんだが、団体行動なので時間厳守をいってもこれだけ人数がいればちょっと時間に遅れてくるひとがでてしまうかもしれないが(いいわけかもしれないが...)、やはり一人一人がちゃんと行動していかなければいけない。団体行動なのだから!

改善点

上で述べたことを改善しなければいけない。ほかにも沢山あるが・・・。

個人的にはやはり旅行係なので次回の春合宿をスムーズに行うために早め早めの行動をしていきたい。

感想

ハードスケジュールだったのでとっても疲れたが良い経験ができた。大学との交流会などこのゼミででなければできなかったとおもう。初日から六時集合したのでみんな終わりの方はグッタリしていたが・・・でも二泊三日でこれだけのことを行えたので良い

経験になった。春合宿は自分と弓取君の旅行係が引っ張っていき、また二年生の旅行係に自分たちがやってきたことを継承していけたらいいとおもいます！！

最後にワールド学生会議に参加できなかったのと沖縄新聞にみんなの写真が載っていたのがうらやましかった！！

北島 明子（3年生）

今回の合宿を通してまなんだ事、有意義だった事

沖縄は日本という国の一部だけど本州沖縄の人から見ると内地と言っていたが私達の価値観と微妙なずれを感じました。それは琉球大学とのディスカッションやウチナンチュー大会でさらに実感しました。

琉球大学とのディスカッションで私のグループでは沖縄のイメージという所から始まりました。私は沖縄のイメージというと「ちゅらさん」というNHKのドラマのイメージが強いと言いました。琉球大学の方は「あのドラマは間違っている。しかしあのドラマを全否定する事はできない。やはり沖縄の人たちはお酒も大好きだし、みんなで集まって騒ぐのも大好きです」そしてアメリカのテロ事件の影響はどうなのか聞いてみると、私達の暮らしでテロ事件の影響を考えるとテレビのニュースがテロ関連のニュースから始まる位しかないので実感が全くない、しかし沖縄は米軍基地が日本最大ということもあり観光客の減少ということで切実な問題になっていました。実際住んでいる沖縄の人たちにとってはそこに基地があることがあたりまえであるのに本土の私達から見ると鉄格子の向こうはアメリカとってしまう現実。そしてディスカッションが終わりそれぞれグループごとに発表しました。あるグループから「沖縄に人たちには甘えがある、もし自分が就職しなくても家族の誰かが養ってくれるから心配をしていない」という意見が出ました。沖縄の失業率は日本平均よりはるかに上回っています。それはこういうところからきているのだと驚きました。

2日目に行われたウチナンチュー大会の学生シンポジウム。ウチナンチュー大会ということに驚かされました。「ウチナンチューとは沖縄人」という意味で、なぜこのような会議が開かれるのかが不思議でした。しかし夜の名桜大学との交流会で聞いてみると沖縄の人は沖縄が大好きだからと言っていました。私は地方から都会に出てきたが都会の方がいいと思ってしまう。それはある意味、栃木を大好きではないと思っているのかも。栃木という所に魅力がないのかなとも思えた。自分の生まれた場所をこんなにも誇らしげに思える彼らはすばらしいと思いました。

そして夜の交流会でいろいろな人と話すと実は1年間休学して外国を放浪していたとか、

ボストンに留学していた、卒業してからまだ決めてないとか実に多種多様な生き方をしている事に驚いた。そしてある人と話していてその人は南米やアジアをバック一つで女の子なのに旅行してきたという人でした。そして私がなんでそんなことをできるの?と聞くと、私にとって旅行に行くということはその土地に行ってその土地に人と同じ目線で話がしたいからだ。そしてそういう目的ならばバック一つで行くと。私はこの人の中にある自分自身というものに対する考え方に驚きました。そしておしゃれの話になり沖縄でもみんなそれなりにおしゃれはするがその人は雑誌もそんなにみないし自分が着たいものを着ると言っていました。私も最近きごちのいいものを着ようになってきたが渋谷や新宿で周り自分とを比較してしまいます。自分では流行というものに流されたくないが流されています。彼女が沖縄人だからすごいということではなく、旅での出会いつまり自分自身をしっかり持っている人に会えて話を出来た事にとてもうれしく思う。交流会をしてほんとは良かったと思っていました。

反省すべき点

事前準備不足ということです。前回のタイ・カンボジア合宿の経験を活かし今回はしおりというものを作成しましたがそれが有効にいかされてなかったと思います。ゼミの時間に旅行の注意点や持ち物ついてやったのにもかかわらず。特にアプチラガマを見学の時です。しおりに懐中電灯と軍手と書いたのに半分以上の人が持っていなかった。せっかくおじさんがつらい記憶を思い出して話してくれているのに。本当におじさんに申し訳ないことをしたと思いました。

改善点、次回へ向けての要望点

沖縄合宿のプランを探してきてくれた佐藤さん、交流会のアポを取ってくれた田崎さん、アプチラガマを見つけてくれた先生。実はこの仕事は3年生がすべきことなのにやってもらってしまった。旅の途中から旅行係が積極的に頑張っていたと思います。だから次回は3年生が準備の段階から力を発揮できるよう改善しなければと思いました。

合宿全体を通しての感想

今回のゼミ合宿は今までのゼミ合宿とは異なり今まではただ上級生の後ろについていくだけでしたが今回は様々な準備をして現地でも段取りなど慌しかったと思います。切実に先生が言っていた「ほうれんそう」という言葉が感じられました。報告、連絡、相談の3つが大切だと思いました。でも帰るときにみんなが「旅行楽しかったね」「ゼミ長、ご苦労様」と言ってもらえた時は本当にゼミ合宿にきて良かったと思えました。

下地 綾乃（3年生）

1月1日（木）から3日（金）の沖縄合宿で私は改めて、団体行動の大変さ・ウチナンチュの暖かさを実感しました。私は今回の合宿では、菅原ゼミの一員であると同時にウチナンチュとして沖縄を訪れました。

1日目の琉球大学比嘉ゼミとのディスカッションでは、私のグループの琉大生が茨城県出身の人だったので、県外出身の彼が沖縄に住んでみての内からの視点、沖縄出身の私が県外へ出てみての外からの視点という全く逆の立場から沖縄を見てどうか、という話をしました。彼は沖縄の人の暖かさ、方言のおもしろさについて語ってくれました。私は東京の良さと同時に、やはり将来は沖縄に戻りたいという事を語りました。あとはテロの影響はどうか、などで話は盛り上がりました。夜の親睦会では、始めは昼のぎこちなさを引きずっていましたが、やはり酒の力は素晴らしく次第にみんな打ち解けあっているように見えました。私は久々の沖縄方言に懐かしさ、うれしさいっぱい、ついウチナンチュの血が騒ぎ、いつも以上にテンションがあがっていました。

2日目のワールド学生会議では、どんな内容なのか全くわからなかったのですが、てっきり菅原ゼミもディスカッションに参加するものだと思っていたので緊張していたら、傍聴人だったので、待っている間が長かったため結構疲れました。夜の名桜大白井ゼミとの親睦会は、名桜生が学食を貸しきってすべて準備をしてくれていたのも、とても感激しました。そこでも私のウチナンチュの血が騒ぎ、名桜生と打ち解けていました。二次会も私達のドライバーの事を考慮してくれて、わざわざホテルのバーでひらいてくれたのも、とてもうれしかったです。

3日目のマブチラガマでは、私は沖縄に住んでいながらそういう場所を訪れたことがなかったので、本物の防空壕を初めて見て、あの広さ、暗さに驚きました。そして自分が今の時代に生まれてよかった、自分は何て恵まれているのだろうとつくづく感じました。その後は沖縄に住んでいた頃に良く行っていたおそば屋さんに行き、首里城を見学し、スーパーに寄り、空港へ向かいました。

今回の私は沖縄出身ということもあって、ゼミ生みんなに観光地としての沖縄だけでなく、ウチナンチュの暖かさや生活習慣、言葉の違いなど、沖縄の良さを知ってもらいたくて、私なりにがんばりました。

反省点としては、ウチナンチュの自分である前に菅原ゼミの一員であるということをお忘れがちだった点です。この事はゼミ生数人にも指摘されました。自分が良かれと思ってとった行動が、他の人に不快な思いをさせている事を知って、正直ショックでした。しかし、これだけの人数が集まれば考え方、意見も人数分あるので、全員が私と同じ意見であるわけがないので、人を説得する難しさを実感させられました。

改善点としては、今回何度か連絡がうまくいっていない点が見られたので、その点を気

をつけていったらいいと思います。そして次回の要望としては、個人的には、アジアへ行きたいと思います。なぜかという、私は前回のタイ・カンボジアが初の海外旅行だったので、アメリカやヨーロッパは費用もかかるし、観光で個人的に行きやすい場所のような気がするのですが、アジアはなかなか観光では行く機会がない気がするので、ゼミの研修旅行を通して行きたいと思います。

合宿全体を通しての感想は、やはり沖縄は素晴らしい所だということです。2年生同士打ち解けられたみたいだし、2年と3年、4年も仲良くなれたみたいなので、この合宿は大成功だと思います。

白井 拓 (3年生)

今回の沖縄研修で自分の中にあった沖縄のイメージは大きく変わった。そして沖縄の同じ大学生たちとの交流でとても良い知識をもらう事が出来た。自分はこれから今回の沖縄研修で以下の事について述べたいと思う。

ウチナンチュ (沖縄人) と沖縄に対するイメージの変化

沖縄の大学生 (琉球大学、名桜大学) の沖縄に対するイメージ

ウチナンチュ 大会の大切さ

今後の課題

まず自分の中のウチナンチュ (沖縄人) と沖縄に対するイメージについて述べるが、沖縄は、高校の修学旅行以来、今回で二度目となる旅行だった。そのため少し見覚えのある景色、光景が見られた。しかし高校時代の沖縄はただの観光、しかし今回の沖縄合宿はむしろ、観光というものではなかった。

ウチナンチュ は、東南アジアっぽい顔立ち、最近芸能人で沖縄出身が多いがあれは少し別格と思っていた。そして沖縄を日本の一番最南端にある暖かい場所、楽園、米軍基地というイメージだった。しかし今回の研修で沖縄を先入観で誤解していた所があった。ウチナンチュ は自分達とは少し違った顔立ちであり、目元は特に違った。そう思ってテレビで上原多加子を見てみたら、確かに少し独特な違いがあった。あと温かいからといって肌が黒いわけじゃなかった。逆に女性は日焼けしない為に東京の女性よりも敏感だった。そして沖縄にはとてもすばらしい文化があった。沖縄とは第二次世界大戦時、戦場となり、多くの犠牲者を出したのは知っていたが、その辛さや悲しさは、忘れては行けないものであると感じた。最近の若者は戦争の事をあまり知らないで非難されていたが、自分は沖縄でこの戦争の辛さ、悲しさを実感する事が出来た。だからウチナンチュ は皆、とても平

和を愛し、とても温かみがあるように感じた。そのためか解らないが沖縄の人は皆、おっとりとしていた。そして車の速度もゆっくり。沖縄という地はとてもどこな落ち着いた雰囲気を感じた。

次に沖縄の大学生の沖縄に対するイメージについて述べるが、沖縄の大学生（琉球、名桜）と交流して共に感じたことは、沖縄を皆愛していることだった。就職も県外に出ずに、沖縄県で就職するというのだ。そして「県外に出る気は無いのか？」と尋ねても皆、「出る気は無い！」という返答だった。過疎化問題はないだろう。しかし話を聞いたら、現在失業率が9.4%らしい。全国平均で5.6%だったのでそれよりもはるかに高いということになるが、それでも沖縄に留まろうとする考えは、よほど沖縄を愛しているのではないかと思った。そして沖縄にある米軍基地についてよく反対意見が出ているが、沖縄の学生は反対する人もいるが、実は賛成している人も多くいることを知った。沖縄の財政は観光と基地関係が大きな割合を占めていて、もしこのどちらかが失われれば沖縄の財政はとても厳しいものになる為、そして基地関係で仕事をしている人も多く、基地が無くなれば失業者もなお多くなると知っている為、沖縄の学生は、そのような考えを持っている人もいる事を知った。

自分達は沖縄研修中、ウチナンチュ大会というものに参加したが、実はこの大会は、世界に散っている沖縄人の二世、三世の学生が四年に一度、沖縄に集まり沖縄の将来について話し合う大会であった。自分達はこの大会に参加させてもらったが、この大会はとても素晴らしいものであると感じた。沖縄を愛していなければ出来ない事である。この大会は沖縄の将来には不可欠であると思うくらい大切だと思った。

自分はこの沖縄研修を経験して、これからの自分の課題は、もう一度自分の身の回り（家族、学校、生活）について見直してみようと思った。自分が今存在する喜び、をもっと感じなければいけないと感じた。そしてこれから自分も少し自分がよければそれで良いという考えは捨て、自分がどうすればこの社会、地域に貢献できるのかを考えてみたいと思う。

まずはゴミをきちんと分別しよう！

自分の地元を誇りに思うようにしよう。

戦争の事をもっと知って忘れないで、平和を愛する気持ちを持とう

自分は沖縄研修で自分を見直せたかもしれない。これから就職、など大きな関門につきあたるが、今回の経験はとてもよい経験になったと思う。そしてこれから自分自身もいろいろな経験をして多くの知識を得ていきたい。

田邊 学 (3 年 生)

学んだことと言えるか分からないが、自分は沖縄のことを何も知らなかったと言うのを実感した合宿だった。

基地のことについて主に話した合宿の1日目の琉球大学比嘉ゼミとのディスカッションで最近の沖縄の若い人は基地問題についてそれほど関心を持っていないということを知った。間違った意見かもしれないが、それは沖縄の未来にとってよい結果を生むと思った。今回の合宿で学んだばかりの知識だが、沖縄は産業の発展が望めず、基地からの収入に頼っていると聞いた。これからの沖縄を考えるにあたって新産業の創出を考えるにしても一朝一夕にできることではないので、基地は現状維持という妥協案は否めない。しかし、最近の若者がそれほど米軍基地を疎ましく思っていないのなら現状維持でも問題はそれほど出てこないのではないだろうか。米に無理やり納得させられているかもしれないが僕はそれでいいと思った。

県外の大学に通っている人でも就職はほとんどの人間が沖縄に帰ってきて就職をするということを知って沖縄の人の持つ沖縄で生まれて沖縄で死ぬという考えに対して考えさせられた。また、夜の懇親会で自分と同じ群馬県出身の人に話を聞いたのだが、沖縄の人は横のつながりが強いそうだ。地元を大切に思う沖縄の人の考えはとて素晴らしい子だと思ったと同時に、そんなに県外は魅力がないのかと少し寂しい気持ちになった。反省しなくてはいけないと感じた点は今回に限った話ではないが、もう少しこれから自分が行くところを知っておくべきだと感じた。また3日目のマブチラガマで持って来いと言われていた懐中電灯を忘れて先生のお怒りを買った。小学生の反省じゃあるまいし「忘れ物をなくそう」なんて当たり前のことをできてなかった自分が情けなかった。

今回物足りないと感じたことは全て個人的な旅行で済ませればよいことなので、合宿として考えれば不満、要望は特に無い。合宿は成功だったと思う。ただ、細かいことになってしまいが集合時間が早すぎて大変だったり、夕食と言うものが存在せず夜の懇談会が夕食代わりだったのが少し不満に感じた。

沖縄は11月でも夏のように暑くて、そこに住む人たちも穏やかで優しい人達で、時間がゆっくり流れていて、心が癒された。県外に出て行った沖縄の人たちがまた地元に戻ってくる気持ちがよく分かった。また、沖縄の抱える基地問題や就職難といった問題についても考える機会を与えてくれたいい旅行だった。

永田 幸子 (3年生)

一日：比嘉研究会とのディスカッション

琉球大学のマスコミ研究会とのディスカッションをしました。私たち菅原ゼミが研究しているテーマとずいぶん異なっていたけれど、話ができておもしろかった。私は琉球大学の松島くんと、菅原ゼミの勾さんと、川田くんの4人でディスカッションを行った。はじめは何から話題にしていいかわからなかったけれど、こっちから質問をしていくうちに気さくに話ができるようになった。

私たちは比嘉ゼミと呼んでいたが、彼らはゼミと言う集まりではないと言っていた。「どういう集まりなのですか？」と聞いたら、単位の履修はなく、マスコミについて研究したい人が集まっているのだと言っていた。そこは杏林大学のゼミ制度とは違って、また、大学にはゼミが存在するものだと思っていた私にはゼミと言うものがどういうものかを知らない彼らはとても不思議だった。しかし、勉強したいという気持ちは同じものだった。形は違っても、何かを勉強したい、研究を深めたいという気持ちは同じなのだと感じた。

一日夜：比嘉研究会との交流会

夜は比嘉研究会の皆さんと村さ来と言う居酒屋で飲み会だった。比嘉研究会の代表の学生が沖縄の楽器を持ってきていた。太鼓と長い筒状の笛と、有名な三線があった。三線では島唄などをうたっていて、現地にいると言う気持ちをととても感じた。

よく話よく笑い、人見知りする感じの人はいなかった。比嘉研究会のみなさんで交流会に来た人たちは沖縄出身が多かった。人は性格や気性などが気候に左右されるのではないかと思った。前にテレビで「ロシア人は笑うのか？」を言う番組をしていて、それを思い出してしまった。ロシアは一年中寒い国で、夏の7,8月でさえせいぜい20 越えるぐらいまでしか上がらない。しかもテレビに映されていたほとんどの人たちが笑いかけたりはしなかった。関係のない話に飛躍しているが、私が言いたかったのは、沖縄の人たちはとてもよく笑い、にこやかで気さくな人ばかりだと言うことだ。

二日：ワールド学生会議

11月に入ってもまだ半袖で充分しのげる沖縄でスーツは暑かった。ワールド学生会議ではウチナーンチュ大会という名前がつけられており、それだけで、沖縄と言う地域が、私の住む埼玉県とは違い、「国」に似た思想があるのではないかと感じた。

ウチナーンチュは沖縄人と言う意味だと言う。ウチナーで沖縄、ンチュで人と言う意味だそうだ。沖縄人を考える会だ。私たちが開場に入った時はちょうど4つのグループに別れてのディスカッション中だった。何について話をしているのかも全然わからなかったが、

会場にいた他の方に話を聞いてみた。4つのグループは、北米チーム、南米チーム、アジアチーム、沖縄チームと名付けられており、それぞれの地域に対する「沖縄」のあり方、沖縄は何をするべきか、などの話し合いがなされていたと教えていただいた。

全体4チームに共通していたことは、平和と文化と経済を通して、沖縄ができることに焦点を置いていた。多かったのが、WEBを通しての情報公開である。それぞれのチームがいくつかのキーワードをポイントとして、そこから話を発展させていたのはとても参考になった。何かを話し合うことにはキーワードが大切だと思った。

今回の合宿で沖縄に対しての誇りが一番感じられたものがウチナンチュ大会であったと言えるだろう。

二日夜：名桜大学 白井ゼミとの交流会

白井ゼミはプログラムについて研究しているゼミで、また私たちとは違う研究内容であった。しかし、白井ゼミとは内容についてのディスカッション等はなく、食事をしながらお酒を飲み、お話す、という感じだったので、研究内容の違いについては気にすることはほとんどなかった。

比嘉研究会の皆さんにも言えることだったが、沖縄の人は酒豪が多いととても感じた。弱い私には到底考えられないほどの量を飲む。居酒屋の飲み放題は赤字続きではないかと心配するほどだった。

名桜大学の食堂での一次会が終わり、私たちの泊まっていたホテルのラウンジで二次会があり、それからさらにホテルの坂の下にあるカラオケで三次会があった。私は二次会まで参加したが、みんな本当によく飲むと思った。

三日：マブチラガマ

糸数壕 = マブチラガマは暗かった。ライトがなければ歩けない状態だった。あんなに暗い所は初めてかもしれない。

戦争中の生々しい話には背筋がぞくぞくした。ちょうど真ん中あたりのひらけた場所で案内の方が昔を思い出し、言葉に詰まっている時は私まで涙が出てきそうになった。その場所でいったん全部のライトを消してみると、目をつぶっているのか開いているのかもわからないほど暗かった。黙祷をしている時には背中に何かが降りてきたような、悪寒を感じた。

私たちの世代は戦争に身近なことがとても少ない。学校の歴史で習うよりも、マブチラガマに行った方がずっと考えさせられると思った。行く前はどんなものなのか、想像もつかなかったが、行ってよかったと思う。沖縄の持つ明るい部分を見るだけでなく、過去の過ちや起こったことを知ることも、沖縄を知る重要な手段だと思った。

学校の歴史の授業で「こういうことがありました。」「はい、そうですか。」というだけでなく、本当のことに触れることは戦争について考える私たちに、もっと大切な思いを与

えてくれる。それは戦争のことに限らないだろう。本当のこと、ものに自分で直接触れるということの大切さを感じた。

三日：個人研修

私は先生と下地さんの三人で沖縄めぐりをした。最初に下地さんの実家へ行ったが残念ながら家族はみんないなかった。

首里城は大きかった。本場の沖縄舞踊もやっていて、見とれてしまった。ホテルで踊っていたものとは異なり、圧倒されるものを感じた。

首里城を登っていき、城の中へ入ると漆の匂いがした。管理の人に聞いてみると、現在の首里城が出てくる前には、琉球大学があり、大学が移動してから全体の修復をしたと言っていた。首里城の上の方から見た市街地では文化の日を祝うパレードが行進していた。住人のみんなが沖縄文化に誇りを持ち、参加しているのだな、と思った。そういう子供のころからの沖縄文化に触れることが多いのも、沖縄という自分のいる土地への愛着を育てるのではないかと思った。

その後は住民が買い物へ行くスーパーへ行った。スーパーへ行くことは私の希望だった。おみやげ物屋で買うのではなく、生活に密着したものを欲しいと思ったからだ。沖縄は物価が安かった。お弁当などの値段を見てみると、関東では500円ぐらいしそうなものが380円、ジュースの安売りでは87円と言う値段がつけられていて驚いた。しかしその分、給料も高くはないらしい。

「じゅーしい」と言う炒飯の素のようなものを下地さんのおすすめで買った。黒糖がとても安く買えたのもよかった。海ぶどうと言うこれもまた下地さんのおすすめ海藻も買った。期待ほどではなかったけれど、空港のおみやげもの屋では多分買えなかっただろうものが買えて満足だった。

福間 海（3年生）

今回「沖縄」という日本の国内にあって異文化を持つ土地でゼミ合宿を行なった事は大変興味深かった。大学生活や私生活において、東京に住んでいる限り出会える方々の可能性は限られてしまいがちであるが、地方都市それも沖縄のようなその地域だけで完結している地域の大学と交際がもてた事はよかった。

琉球大学の敷地面積の広さに驚き、杏林大学の狭さを再確認した。

琉大の学生とディスカッションした事で数多くの発見があった。その中で1番大きなものが“日本地図を思い描いたとき、沖縄は入っていない。沖縄の地図を思い描いたときに

は、他の県・地域が入っていない”。頭のなかで日本地図を形作ったとき、北は北海道であり南は鹿児島までである。沖縄県は、ない。また、例えば、東京の地図を思い浮かべたときには北に埼玉県、南に神奈川県、東に千葉県、西に山梨県があるのだが、沖縄県を思い浮かべた場合、まわりは、海だけである。沖縄は孤島である。この考え方は琉大の学生も納得していた。

また基地問題について話を聞いたところ、逆に「東京にも横田や厚木、横須賀基地があるだろう？それらの基地についてどう考えているのか？」と聞かれてしまった。確かに学校の周辺、通学路の途中に米軍基地が存在しているが、決して身近な存在では無い。周辺住民に対する米軍の割合が少ないことも関係していると思うが、生活圏の外にあるというのが最も大きいだろう。沖縄のように経済が基地に依存していることも無く、その関係者と接する機会が無いから TV の中の出来事としか認識されないのでは無いか。距離的には近い。が、精神的に遠いのである。

世界学生会議で、県外出身者が「ヤマトンチュウ（県外出身者）に対する壁を感じる」と発言していた。沖縄は島であるがゆえに、閉鎖的なのもかもしれない。

小・中・高校で戦争の悲惨さ、太平洋戦争における唯一の一般市民のいる日本の国土での戦闘として沖縄戦を学んでは、いた。しかし実際にマブチラガマで話を聞き、目で見ただことは救うことの出来ない現実であった。また、中国人である母親の教育のお陰で太平洋戦争について、そして戦争という行為についてかなり知識を持つことができたと思っている。マブチラガマの語部の方や、未だ語ることを拒む方、探し人をされる方にとって戦争は、まだ、終わってはいない。

出発日朝早くの集合、移動に次ぐ移動、そして連日のコンパは正直疲れた。

2泊3日の中で連日、行くべきところが多く移動だらけで無意味な時間が多かった。コンパでも酒が入ってしまえばただの飲み会とさほど変わらず、雰囲気についていけず、あまり人と話すこともせず、無為に過ごしてしまった。沖縄で合宿をしているという実感は自由時間に海岸へ行ったときぐらいしか得られなかった。2日間同じ大学とコンパでも良かったのではないかと。1夜ごとに別の大学では打ち解けた頃に解散になってしまい、常に歯がゆさが残った。結局、内輪ばなしが一番盛り上がっていた点が残念だった。

しかし、この合宿に参加できたゼミ生達と学年の壁を越え強い絆、一体感がうまれたと思っている。次回は、同じく離島である北海道や、本州の中で東京から最も遠い島根・鳥取といった地域でゼミ合宿するのも良いのではないかと、と早々と次の合宿の候補地を考え始めている。

弓取 祐平（3年生）

今回の合宿を通して学んだこと、有意義だったこと

オキナワ合宿はかなり密度の濃い内容で、オキナワの文化・歴史について体で感じることができた。旅行係として、計画どおり合宿が進み、無事終了することができたことは大変有意義であった。

琉球大とのディスカッションは、いまおかれているオキナワの基地、経済の問題など熱く語り合うことができた。ディスカッションの相手の学生は、本土から琉球大にきた学生で、本土出身の学生から見たオキナワの基地、経済の問題、文化についてオキナワ出身の学生とは違った意見を聞くことができた。

ワールド学生会議では、オキナワに関わりがある学生が沖縄の未来についてどう考えているかや、レベルの高いプレゼン・ディスカッションの仕方を学ぶことができた。

反省すべき点

反省すべき点は、旅行係として秋合宿の計画が遅れたこと、合宿日程の伝達が十分でなかったことである。秋合宿に行くことがかなり前から決まっていたのに、1ヵ月前にやっと計画するなど遅くなってしまった。琉球大のディスカッションや、ワールド学生会議の内容について下調べをしなかったせいで、何をすればいいか告知することができず、みんなを困らせてしまった。

改善点、次回へ向けての要望点

先ほどあげた反省点を改善することは勿論だが、合宿の目的やなぜ沖縄にしたのかをもっと明瞭にしたほうがいい。例えば、沖縄の基地問題を重点的に学ぶとか、文化について学ぶとかはっきり目的を決めた方が学生とのディスカッションがやりやすい。あと、日程が過密すぎて体力的にきつかったので、次回はもっと日程的にゆとりをもたせたほうがいい。

合宿全体を通しての感想

2泊3日という過密スケジュールで結構つかれた。11月なのに熱いし沖縄は日本ではない気がしたが、海は冷たかった。けど、オキナワの人々は暖かかった。ファンカーゴ8台は気持ち悪かった。カーナビつかえる。ビーチバレーは燃えた。初めて新聞一面飾れた。

よく酒飲んだ。泡盛うまい。下地はやっぱ酒が好きだった。

勾 暁光（3年生）

日本に来て5年目の私にとって、初めての合宿です。緊張で胸がいっぱいでした。何をすればいいのですかの？頭が真っ白でした。でも、皆がいろいろ教えてくれて助かりました。いい勉強、いい思い出になりました。

一番目、洞窟の見学。ガイドさんの紹介で沖縄の戦争について少し分かることができました。暗い洞窟の中で多くの人々が亡くなりましたが、ごくわずかの人々は生き残り、まったく光のない真っ暗な洞窟のなかで頑張ったのでした。すごい感動でした。戦争はどの国にとっても、どの国民にとっても悲劇だと思います。「戦争」の意味が分かって、「戦争」の苦しみを感しました。でも本当の戦争、本当の苦しさは分かりません。平和の時代に生まれた私たちは、とても幸せだと思います。今の平和を守っていかなければなりません。

二番目、沖縄の海。ガラスの船で海底の世界をみました。いつもテレビで見た珊瑚、魚が、夢のように目の前にいて大変感激しました。沖縄の人々がこんな綺麗な海を守ってくれていた本当に感謝しています。これは一人の力ではできません。多くの人々が自然環境を大事にしているのです。

三番目、今回の合宿では、旅行係り、ゼミ長、副ゼミ長の方々は偉いと思いました。

旅行係りは最初から、最後まで本当に真剣にやってくれました。これは言葉ではなく、行動によって真剣さがわかりました。

ゼミ長は朝の集合、夜の見回り、飲み会の手伝いなど、いろいろと大変で、有難うございました。いくら疲れていても、いつも笑顔を忘れず、本当にご苦労様でした。

副ゼミ長は飲み会で何回も、何回も盛上げてくれて凄くよかったです。もし副ゼミ長がいなかったら、どんな飲み会になるか想像が付きません。ありがとうございます。

最後に、言いたい事は、また合宿に行きたい。でも私は、騙されたくないです（貝殻水着）。本当に今回の合宿はよかったです。みんなと仲良くなれました。

今村 忠裕（2年生）

（1）今回の合宿を通して学んだこと、有意義だったこと

琉球大学とのディスカッションでは少人数で意見の交換をすることが出来ました。

僕は、宮崎さん浅見さん、そして琉球大学の内間健友さんと横田亜礼さんとグループになりましたが、4年生、3年生、2年生がそれぞれ一人いたことによって、幅広い話し合いが持たれました。

話し合いの中では、深い討論はせずに互いの意識を伝え合うことにしました。

まず沖縄の抱える基地問題について話を伺いました。そこには既に沖縄にとって基地が、「支配され必要のないもの」ではなく「生活の一部として機能し、なくてはならないもの」になっているという現状を知ることが出来ました。つづいて、僕達が持っている沖縄のイメージとして、観光について話を聞きました。「沖縄は豊かな自然と海があり、近年、若い世代に人気のリゾートである」と伝えたところ、沖縄に建てられているリゾートホテルは、ほとんど内地（本土）の企業によるものである。

そして、その利益もまた沖縄には残らず、内地に持って帰られてしまうそうです。沖縄の人々にとって僕達の考えている観光やリゾートはとても歓迎できるものではないようです。

彼らはそれらが自然を破壊していることを知っています。内間くんはエコツーリズムというものを教えてくれました。エコツーリズムとは自然をそのまま観光として保護していく事だそうです。僕達の持っている沖縄のイメージと沖縄の現状、そして沖縄に住む若者達の思い、この三つに大きな差があったことは、沖縄に行くまで想像できないことでした。

（２）反省すべき点

レンタカーを借りての行動だったので、連絡を全ての人に伝えるのに時間がかかった。アブチラガマ見学の際、軍手及び懐中電灯を持ってこなかった人がたくさんいて、とても恥ずかしい思いをした。

（３）改善点、次回へ向けての要望点

- ・あらゆる状況を考慮して、しっかりとした計画を立てる。
- ・合宿中は臨機応変に行動することは大事であるが、集団としての自覚を持ち他の人々への配慮を怠らないで行動する。
- ・突発的な状況下でも、連絡の行き違いや認識の違いが無いようにしたい。
- ・各係はすべき事をはっきり認識し、自分の仕事に対して責任を持ち、積極的に活動する。

（４）合宿全体を通しての感想（意見じゃなくていいよ）

沖縄の若者にはあまり冗談が通じなかった。

僕の冗談があまりにも上級だったのか・・・

あまりにも低級だったのか・・・

栗城 宏行（２年生）

今回の沖縄合宿で有意義だったこと、学んだ事としては、まず一日目の琉球大学との交流会では、比嘉ゼミの学生の皆さんとディスカッションを行いました。

ここでは主に米軍基地のことなどについて話し合いました。自分の住んでいる家の近くにも米軍基地があり、日頃から米軍基地は自分の生活にとって邪魔なものにしか感じてなかった。また、沖縄の米軍兵による暴行事件のことも耳にしていたので、当然、沖縄の人々にとっても邪魔な存在なのだろうと考えていた。しかし、米軍基地に沖縄の社会にとってプラスの面があることを聞き、驚きました。現在、基地を移転するという計画があり、基地を移転して北谷のような商業地域にするという計画がある。しかし、移転してしまうと基地内で仕事をしていた人々が職を失ってしまう。実際、基地内では、解雇される事がなく、沖縄の雇用を安定させる役割を果たしている。このように米軍基地が沖縄に良い影響を与えている事は意外に感じました。

二日目の名桜大学の白井ゼミの皆さんとの交流会では、食事をしながらの交流会ということもあり、より身近な生活の事について話し合うことが出来ました。まず、面白かったのが方便の事です。朝の連続ドラマ「ちゅらさん」をみていたので、方便のことはなんとなくわかると思っていたのですが、実際は、少し違って良かったです。

三日目のアブチラガマの見学では、大変ショックを受けるとともに貴重な体験となった。戦争の体験者の方から直接話しを聞くことが出来たのは初めての事でした。アブチラガマに入りまず感じたのが、真っ暗で足場も悪く、環境は非常に悪いと感じました。また、当時の子供たちが学徒隊としてアブチラガマの中で怪我をした兵士たちの救助をしていたという話しを聞き、当時の戦争の悲惨さを改めて思い知り 2 度とくりかえされてはならないと感じました。

今回の合宿の反省点は事前にもっと勉強をしていけばよかったことです。アブチラガマの見学ではもう少し知識があればより有意義な体験となり、もっと多くの発見があったのかもしれないと思うと、もったいないことをしたと感じました。

改善点・次回合宿への要望点は、他の大学や現地での研修も非常に勉強になったのですが、もっと菅原ゼミだけでの時間があつた方が良かったと感じました。まだ二年生はゼミに入ったばかりで、やっと全員の顔や名前を覚えた頃だったので、そのような時間も必

要だったと思います。

合宿全体を通しての感想としては、初めて沖縄に行ったのですが、気候や文化など様々なことに違いがあって見るもの見るものに新鮮さを感じました。これからは、もっといろいろな所へ旅行してみたいと感じました。

小岩 伸一（2年生）

（1）沖縄合宿初日、琉球大学の学生達とディスカッションをした。

杏林生3人、琉大生1人で沖縄のことについて話し合った。私たちは4年生の勝連さんという学生にいろんなことを質問したが、ほぼパーフェクトに答えてくれた。

私たち東京で暮らす人々が考えたこともないような様々な問題を沖縄は抱えている。その時はちょうどアメリカのテロ事件のこともあり、話は米軍基地のことになった。自分は"外国の基地があるなんて迷惑な話だ、でも日本にとってアメリカはなくてはならない存在、従わなければ"というぐらいにしか思っていなかった。だが米軍基地があることで仕事に就ける人がいたり、その地区の利益になったり、ということもある。

その反面、訓練機の騒音がすごかったり、住民に対する暴行事件が起こったりもする。自分は沖縄を観光地としてみていた面が大きい。同じ日本にして少し違和感をおぼえるような土地であった。

3日目、玉城村の糸数壕に行ったとき、真っ暗闇の中案内してくれたおじさんの話を聞いて恐ろしさ、残酷さ、悲しみを感じ、寒気がした。話が終わり一列になって帰るとき、自分は最後尾を歩きおそろおそろ後ろを振り返るとほんとに真っ暗で「こんなところに何日もいらねー」と思い恐怖感というより妙に悲しい感じがした。

また各ゼミの学生との交流会は新鮮さがあって楽しかった。うるさいけどいいヤツばかりだった。沖縄で何を学んだかといえば、沖縄人のすごさ（酒とか性格）、そして過去の恐怖と悲しみのほんの一部である。

（2）反省すべき点は、

自分個人でいうと、バカみたいに前日から羽田に泊まりこんでいたこと、3日目の朝寝坊してしまったこと、沖縄の人に東京とはどんなところが教えられなかったことである（八王子の良さは伝えた）。ゼミ全体でいうと、車が8台もあって連絡がうまくとれていなかった。

（3）改善すべき点は、

団体行動なので足を引っ張らないよう早く寝ます。
行動の決定、変更がある場合は連絡してください。

(4) まず、初めての飛行機にビビッた。

そしてとても異国感漂う沖縄の湿った空気が印象に残っている。自分は2年生として初めてゼミ合宿に参加したが、学生が主体となっていく合宿で問題もあってある意味よかったと思う。

自分は後ろをついて歩いているだけだったが、学生が30人もいるとまとめるのも一苦労なようだった。そして、沖縄という土地もなかなか手強い土地だった。

小澤 久美子 (2年生)

初めてゼミ合宿に行き一番最初に学んだ事は、荷物だった。先輩の荷物の少なさに驚嘆した。3日目同じ服でもいいらしい。それから、洗面用具はホテルなら必ずあるという事だ。沖縄に到着し、車で走り出した頃から身体に感じ始めたのは、言うまでもなく気温差である。この合宿を終えるまでに何度思った事だろう。11月とは思えない暑さだった。そして、この時期に咲くハイビスカスの花は、可憐というには程遠く、堂々たるものだった。

一番初めに訪問した琉球大学は、大学の中に信号機があるという程、とても広大な土地を持った大学だった。私の班は、琉球大学の4年生の人が質問に対し熱心に答えて下さったのでとても理解しやすかった。自分が4年生になった時、この4年生の様になれるのかと考えていたら、心配になった。話し合いの中で最も話題の中心になったのが、やはり米軍基地の事だった。沖縄にある米軍基地の割合は、日本全体の75パーセントを占めて、今基地を取り壊す事が問題になっているが、沖縄の人は基地の中でも働いている人がいるため、基地がなくなったとしても困難を免れる事は出来ないようだ。それから、沖縄の人は本土の人より集団意識が強いため沖縄の人の方がUターン就職が多いということだ。そして、忘れてならないのがアロハシャツがカリウスウエアとしてスーツ代わりになっているという。明るいイメージを作るとはいえ、沖縄の人柄だろう。以前に述べたハイビスカスだが、気温が極端に下がり過ぎない限り一年中咲いているらしい。さすが沖縄である。夜の懇親会では、うちなんちゅうはお酒が大好きだという事が証明された。

2日目のワールド学生会議では北米チーム、南米チーム、アジアチーム、沖縄チームの4チームに分かれており、激しい討論の結果、大体が沖縄を世界各国に広め後継者に継承してもらいたいという事になった。確かに、私は日本人なのにかかわらずこの旅行にくるまでは、上辺だけの沖縄しか知らなかった。しかし、今回の旅行で沖縄民謡や首里城など

古くから伝わる沢山の文化に触れる事が出来て、沖縄に1歩近づいた気がした。

私は3日目のマブチラガマをかなり侮っていた。最終日は朝から晴れていた。私たちが車で現地に到着すると、突然のスコールが2度にわたり降ってきた。洞窟の中に入ると、雨のため足場が普段より悪くなっていて、中は本当に真っ暗だった。語り手のおじさんは、戦争時代の話をとても生々しく語って下さった。ひたひたと流れる水の音とその場のひんやりした空気は何かを感じさせた。無意味な戦争などするものではないと改めて痛感しながら、40秒の黙祷を捧げた。私にとってこの暗闇の中の40秒はいつもの倍以上にも感じさせるものだった。外に出ると雨はやんでいた。今のアフガニスタンの戦争もそうだが、罪のない人がなぜ殺されなければいけなく、殺さなければならぬのか、もう一度考えてほしいと私は思う。

この旅行で私個人の反省点は勝手な行動をしたために、周りの人に心配かけてしまった事だ。集団行動なので些細なことでも報告するべきだと思った。そして、相手の立場になり、話しを受け入れる事も大事なんだと改めて感じさせられた。初めて沖縄旅行は本当に色々な事があったが、沖縄を沢山知る事ができ、皆と話しができたのでよかったと思う。せっかく4年生と交流できたのに一回しか一緒に旅行できないのは、とても淋しい……。

坂本 佑美 (2年生)

今回の沖縄合宿を通して、学んだ事は数多くあった。また、個人的な旅行では知ることのできない事も体験する事ができた。

まず、1日目。とにかく一番はじめに感じたことは「暑い！せみが鳴いている！！」ということだった。同じ日本の中でここまで気温に違いがあるとは思っていなかったからだ。それだけではない。咲いている花、建物の造り、車のナンバー、といったように見渡す限り普段私が目にしているものと違いがあったのだ。

そんな中琉球大学の方々とのディスカッションがはじまった。私の班には沖縄出身のひとがいなかったためなのか、沖縄文化というより現在の沖縄について話し合った。米国で起こったテロ事件の影響はどれくらいあるのか、という質問に対しては観光客が多少減っただけであるという答えだった。これは、とても意外な答えだった。東京に住んでいる私でさえ、多かれ少なかれテロに対して恐怖感をもっていたのだが、彼らは全く現実味がなからほとんど気にしていないと言っていた。これは、驚きと同時に少しほっとさせてくれる答えであった。次にメディアの話になった。最も驚いたことは、東京では当たり前のように放送されている東京ドームの巨人戦が放送されていなかったことだ。また、新聞の種類も2種類と少なかった。後に行った首里城で知ったのだが、琉球新聞の創設者は首里城の王様だった。しっかりとした先見の目をもっていたことがわかる。今思うと、今回の

合宿ではテレビや新聞といったメディアに触れる機会がほとんどなかったのもう少し内容を知りたかった。

その夜の懇親会では比嘉先生と話す事ができたため、私が持っていた疑問や興味について答えてくださった。私たちは沖縄という土地のほとんどを、メディアを通して知るために多くの誤解があるとのことだった。例えば、沖縄特有の楽器を弾ける人はごく一部の人であるということ、踊りは教えてもらわなくても自然と覚えていくということであった。逆の意味で驚いたことは、沖縄の学生のほとんどは、東京の大学に通っている学生が東京出身であると思っているのだと教えてくださったことだった。

2日目。沖縄サミットの会場に入れるだけでも少し緊張したのだが、ワールド学生会議に出席するというとても貴重な経験までできた。住む国の違う多くの人たちが意見を言い合う姿に、自分もその中に混ざって議論をしてみたいという気持ちを持つことになった。

その夜は名桜大学の人たちとの懇親会で、沖縄の人たちの人柄に触れることができた。みんな自分の意見をきちんと持っていた。そして、自分の住んでいる沖縄を大切に考えていた。誰かに自分の地元を紹介する時、私は自信をもって話せることがどれくらいあるのだろうかと考えさせられた。

3日目。マブチラガマという洞窟に入り、ここもまた驚く事が多々あった。なにより私が想像していた洞窟とは全く違っていた。洞窟内は、語り手の方の声と水の落ちてくる音しかなく、明かりを消した時には何かに押しつぶされそうな感覚さえ持った。語り手の方が話してくださった内容は、人間が人間に対してする行為ではなかった。非情や嘘が当たり前で、毎日生きるために残酷な状況を見つづけなければならないなんて考えるだけで悲しくてつらくなった。あらためて戦争が残した爪あとの大きさを知ることになった。

その後の個人研修では、まず海へ行ってグラスボートに乗った。名桜大学の人に海はきれいであることが当たり前だと話されていた私は、その感覚がすごいなあと思っていたが一目で納得することができた。本当に原色の魚やサンゴが目の前にあった。きれいといしか言いようがなかった。

次に首里城へ行った。朱色と金色でつくられた首里城は中国を意識してつくられたものできれいだった。階段など白い石はサンゴ石だと案内の方が答えてくれた。最も印象に残っていることは、首里城に中国の王朝を招いた様子をあらわした模型の中で、すでに琉球の人たちが中国の人たちと対等になっていたことだった。これは、とても意外で驚いた。今回の合宿では、勉強になったことがたくさんあったし、東京にいただけでは知ることができないこともたくさん見つけることができた。ただ今考えてみると、今回は初めての合宿だったということもあり、受身であることが多かったように思う。次回はもっと積極的に自分から意見を言いながら、行動していきたい。

立川 孝司（2年生）

合宿で学んだ事、有意義に思った事

私はこの合宿で初めて沖縄へ行きました。初めて行った率直な感想は、気温が想像以上に高かった事、交通量が多くて驚いた事、顔が濃い人ばかりではない事、ウチナーンチュは本当に酒豪が多い事・・・など他にも色々な事がありましたが、楽しかったのでまた機会を作って行きたいと思いました。

この合宿で学んだ事は、私と沖縄の人との米軍基地に対する考え方の違いです。話を聴いただけですが、東京の横田基地とは違う印象を受けました。その違いとは、沖縄の基地の方が生活に密着しているという事です。なぜかという沖縄の経済は基地と観光によって成り立っていると言っても過言ではないでしょう。つまり、沖縄の人が基地を拒絶してしまうと、働く所を失う事になってしまうという事です。しかし横田基地の場合は、別に基地に頼らなくても他に働く所が多く有ります。だから私はそれほど基地問題について沖縄の人ほど関心がないのだらうと思いました。今回の合宿によってこれからは沖縄の基地問題に対しても目を向けなければならないと思いました。

合宿での反省点

反省点は以前から自分の中で問題であった“人見知り”によって、沖縄の人とあまり交流ができなかった事です。一日目の琉大生との交流会（居酒屋；村さ来での飲み会）の時、最初はほとんど杏林のゼミ生とばかり話をしてしまい、琉大生とあまり話をしませんでした。しかし、途中から「それではいけない」と思い、琉大生と話をする様に心掛けましたが4～6人くらいとしか話せませんでした。「もっと最初から話していれば・・・」とすごく後悔しています。

もう一つは、夜遅くまで話をしていた三日目の朝寝坊をしてゼミの皆を待たせてしまった事です。個人的な旅行ならいいけれど、ゼミなどの団体行動においては輪を乱す様な事、それによってスケジュールが遅れるという事は良くない事です。本当にゼミの皆様にはご迷惑をお掛け致しました。

合宿の改善点

- ・ 積極的に現地の人と交流をする
- ・ 普段できる事（例えば雑誌を読んだり、現地の人と交流をしないでゼミ生とばかり話しをしたりする事）はしない。つまり、できるだけ現地でしかできない事をする

全体の感想

今回の沖縄合宿で一番印象に残った場所は、アプチラガマです。戦時中に空襲があった時はあの穴の中で生活をしたり、勉強をしたり、ケガの治療をしたり、と色々な事をしていたという事に驚きました。その中でも特に印象に残ったのは病棟での話です。病棟だと言われた所も病棟と言うか“ただの穴”でした。そこでケガ人や病気の患者を治療したりしていたという話はとても信じられませんでした。当時戦死する人がほとんどであるという事もあって、ケガで腕や足を切断される事は運がいい方だったと言っていたが、現在平和に生活をしている私には残酷に思えました。そしてガイドの人が病棟のあった場所で涙を浮かべながら話をしていて顔が忘れられません。楽しい事を体験するのもいいけどこの様な体験をするのも貴重だと思いました。

今回はゼミに入って初めての合宿だったので不安でいっぱいでしたが、すごく大変だった、楽しかったり、考えさせられたりと、色々有りましたが、とても充実した時間を過ごす事ができました。

田中 雅之（2年生）

僕にとって初めての沖縄。テレビなどの知識から先入観をもって上陸した。ずっと行きたかった場所なので少しドキドキしていた。反面「夏」や「海」が嫌いなので若干憂鬱な気持ちもあった。現地についた最初の感想はただ暑かった。東京では冬目前なのに沖縄はまだ夏と言う感じだ。

ぎゅうぎゅうに詰まったスケジュールというのが必ずくるうというのは定説らしい。休憩する暇もなく首里城に行く予定をキャンセルして琉球大学へ直行した。東京では考えられない敷地の広さだった。着いた当初から感じていたが島の面積は小さいのに道や建物が詰まっている感じはしなかった。特に道が広くて、もともとエキゾチックな雰囲気のかアメリカにいるような感覚だった。それをあやうく口に出してしまうところだったが、もし現地の人を気分を悪くしてしまったら悪いと思って喉までとどめておいた。

学生との交流会では現地に住んでいる人の生の声が聞けた。彼らとは東京と沖縄の文化の紹介等をした。沖縄は電車が発達していない。なぜなら国鉄が始まった当時沖縄はまだ外国だったからだ。そのかわり一人一台車を所有しているのが当たり前ようだ。東京ではまず考えられない。うらやましいかぎりだ。しかし車がないと何処にもいけないらしい。

彼らは僕達のことを「内地の人たちは・・・」と呼んでいた。なんの事が解らなかったが、そのことについては気が引けてつっこんで聞けなかった。なぜなら最初「ナイチ」という初めて聞く言葉になんとか話を合わせていたが、だんだんわかってきた。そして彼らにとって「内」と「外」という概念があって彼らにとって僕らは「外国人」のように思

われていると思ったからだ。同じ日本なのにやはり沖縄の人の心の中には外国という感覚があるのだろうか。そう思うとうかつに「外国みたい」なんて言えなかった。それと同時になぜか少し悲しい気がした。僕達はウチナンチュではない。内地の人間だ。そう思うと「あんた達は部外者」みたいに思われている気がして。

沖縄は観光産業が大きな経済の支えになっている。それ故の開発による環境破壊が問題だ。あの白い砂浜はほとんどが人工のものだ。綺麗な砂浜や海は本土の西側に集中している。東側は工場が立ち並び、とても見れたものではない。このような開発によって森林が伐採される。そうすると赤土が表面へ露出して大雨などで海へ流れ込む。そのため海が真っ赤に染まるそうです。色がつくだけならまだいいが、赤土の赤い色は土が酸化して赤くなっているのが海に流れると海が酸性に傾いてしまって、珊瑚やその他の海の生物に多大なダメージを与えてしまう。赤土流出をはじめとする環境問題は沖縄にとって重大だ。

現地の人々が着ているアロハシャツがよく目についた。正確には「アロハシャツ」ではなくて「かりうしウェア」という。これは沖縄県が正装として推奨しているそうだ。だから役所の人も着ているし、銀行マンも着ている。これも観光産業の一環なのだろうか。

東京の人間にとって沖縄の気候は暑いの一言につきるが、ウチナンチュにとっては寒いようです。泳ぐ人もあまりいないと言っていました。

一番聞きたかったのが米国同時多発テロ後の沖縄の様子だ。ニュースではあまり触れていなかったので生の声を聞きたかった。日本の0.6%の米軍基地のうち75%は沖縄に集中している。当然テロ後はピリピリした空気というかもっと緊張していると思っていた。しかし実際は普段の生活と変わらないようだ。本人たちは「別になんともないんですけどね。」と言っていた。観光産業が経済の支えになっている沖縄にとって観光客の減少は死活問題だろう。

現代人はマスコミに動かされている。マスメディアで得た情報をうのみにしすぎる。メディアは正確な情報を得られるが、火のないところに煙を立たせるのもマスメディアだ。それを100%信じきってしまうのは危険なことなのではないだろうか。沖縄の観光に関してもマスメディアが「沖縄旅行は危険だ」という根拠のない不安を煽っているような気がする。

沖縄は狭いようで意外に広い。移動も一苦労だ。この2泊3日はかなり運転した。琉球大学から宿まで、宿から飲み会の会場までの移動はほぼ沖縄縦断に近くて大変だった。

夜の懇談会（飲み会）ではあまり話はせずに一人で飲んでた。話では沖縄の人はとにかく酒に強いらしい。本当はどうかよくわからない。これには理由があって、沖縄には東京のようにゲームセンターやカラオケなどの娯楽施設が少ない。だからやることがないと飲む機会が必然的に多くなる。その結果酒に強くなるのだそうだ。

琉球大学の学生が現地の楽器を持ってきていた。僕は一人の学生に三線（三味線？）を教えてもらってずっと弾いていた。僕はもともとギタリストなので教えてくれた学生が1

0日かかったのをその場で弾いてしまった。先輩の話では三線を弾いていたと思ったら抱いて寝ていたということだ。あとのことはあまり覚えていない。

2日目の午前中は自由行動だった。僕は同じ部屋の人たちと島をしばらくドライブした後、海岸で昼食をとった。沖縄の砂浜に行ったのはこれが初めてだった。不思議なくらいキレイな絵の具で塗ったようなエメラルドグリーン的大海と白い砂浜。感動した。いつまでも見ていられる。写真や画面で見ると実際に見るのでは感動の度合いが全く違う。遠くの方で海の色がはっきり分かれるのに気がついた。急に深くなるからだろうか？それとも珊瑚のせいだろうか？それとも潮の流れのせいだろうか？

午後はウチナンチュ大会に出席(?)した。前知識がなかったので正直何をやっているのか、よくわからなかった。唯一わかったのは沖縄の米軍基地問題や環境問題について世界中の人たちが真剣に意見を交わしていたことだ。今回のウチナンチュ大会では沖縄のことに限定して開催されていたようだが、このような機会が世界中で、またあらゆる議題で開催されるようになれば世界のあらゆる民族、文化交流や意見交換が盛んに交わされ、グローバル化に良い影響を与えるのではないだろうか。地球化することによって経済格差や民族差別が生まれてしまうのならむしろ国々は分かれていたほうがいい。しかし相互理解の道を歩めるのなら誰も不幸になることなく地球化へ進むことが出来ると思う。

その日の夜は名桜大学の学生と交流会をもった。彼らには沖縄の方言を教えてもらった。その後は早めにホテルに戻って就寝した。

3日目。僕が一番沖縄を感じたのは3日目だった。午前中のアブチラガマ研修は色々考えさせられた。ここに逃げ込んだ多くの人々は殺され、いまなお足元には骨が残されているという。胸が締めつけられる思いだ。あまりに残酷で出来れば知りたくないような内容だ。しかしあえて生々しい「痛い」話をする事で悲惨な戦争の記憶を風化させないようにすべきだ。これは僕達のような戦争を知らない世代にはなおさらだ。ガマに入った瞬間空気が変わる感じや、今でも当時のそのままに残されたガマ内の様子。地獄絵図や悲鳴が浮かぶようだった。肌で感じるガマは想像を絶するものだった。戦争に良いも悪いもない。悲劇は二度と繰り返してはいけない。

午後は各自自由行動で、3日目にして初めて沖縄らしい食事をして、その後僕達は首里城へ行った。3日目は天気が悪くまるでスコールのような通り雨が何回か降ってきた。その日はたまたま首里城祭をやっている日でエイサーや四つ竹などの伝統芸能を見ることができた。

首里城正殿にも入った。中国、朝鮮、東南アジア諸国と幅広く交易を広げ、華やかな交易時代を築き上げた様子がよくわかった。

今回は下準備が足りなかった印象を受けた。そのため旅の目的が十分に達成されていなかったと思う。研修旅行ではなくて観光旅行にしてしまった方が今回の場合は、より沖縄を感じる事ができたと思う。次回はもっと予定を入念にチェックして無理のないスケジュールでやりたいと思った。

沖縄の人は基本的にはみんな良い人ばかりだった。みんなお祭り好きで明るくて。ただ時間にルーズなのがちょっと困った。

沖縄から見ても東京から見ても空は同じだった。

戸井 俊夫（2年生）

初の飛行機、きれいなスッチーに心を奪われ始まった沖縄旅行だが、一番印象に残っているのはマブチラガマだ。今まで戦争の話をきいてある程度の怖さは知っていたつもりだが、あの暗い中おじさんの話を聞いたとき、戦争の状況が浮かんで来て、自分が戦争を体験しているくらい怖くて生々しかったのをすごく覚えている。

一日目、二日目は各大学との交流を深めた。一日目は琉球大学とのディスカッションした。ディスカッションをしている中で、問題になっている沖縄基地の話題になった。戦争を経験している世代は基地について反対しているそうだが、戦争を経験していない世代は基地があった方が土地などの関係上、利益が出るので基地はあった方がよいと意外な回答が返ってきたのはびっくりした。また以外にも朝ドラで「ちゅらさん」という番組の中に出てきた、ゴーヤマンやおばーの話なども出たりしてとても楽しいディスカッションになった。

また二日目の名桜大学でも、沖縄の文化や、状況、食べ物、酒、などを知れてとてもいい経験になったのと同時に魅力的な島にとっても興味を持ち好きになった。

ワールド会議では、同じ学生なのかという話し合い、発表などを聞けてとても勉強になったし、刺激になった。

最後の日の自由行動では、国際通りに行った。アジアのにおいがブンブンし、店の中には商売上手な人たちがたくさんいる場所だった。その中で僕たちは懸命に値切ったり、みんな飯を食ったりといい思い出になった。町や人は元気だったように見えたが、テロの影響で旅行客が減ったことについては嘆いていた。

沖縄合宿を通して、団体行動なので、時間厳守が一番大事だと思う。その他に、情報交換がうまくいっていない場合があった。この二つに加え、計画をきっちり立てて、楽しくいい思い出ができる合宿にしたい。